



# 一寸法師

1月21日

Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

## 1月21日のおはなし「一寸法師」

---

目を覚ますと一寸法師がいた。

もちろん幻覚に決まっている。

そこは病院のベッドで、おれは体中にいろんな管を刺されていて、スパゲッティにつかまった蠅よろしく身動きもままならず横たわっていた。

「調子はどう？」一寸法師がおれに尋ねる。「どこか痛む？」

おれは思わず吹き出しそうになったが、その瞬間、全身にもものすごい衝撃が走った。喉の奥で声にならない妙な音が出る。返事をしたくても声にならない。

「全身痛いんだね」

なれなれしい調子で一寸法師が言う。その通り。「どこか痛む」なんて生易しいものじゃない。全身が痛い、それもひどく。まさにそれが言いたかったことだ。考えてみればおれの幻覚なのだ。いちいちおれがしゃべらなくてもおれの考えていることなどお見通しというわけだ。

「ぼくのこと、幻覚だと思っているでしょう」

ほらやっぱり。そんなことを不満そうな口調で言いながら、その実はただおれの考えていることをトレースしているだけだ。おれにはわかっている。どうして一寸法師の幻覚を見るのかが。なぜなら、一寸法師とはおれがおれ自身につけたあだ名だからだ。

例えばおれはゴルフでホールインワンを出したことがない。限りなく惜しいときは何度かあった。そういうときに耳にするおなじみのフレーズ。それが「あと3cm」だ。例えばおれは射撃の選手権でオリンピックまで後一步というところまで登り詰めた。選考試合で最後の最後にミスをした。それさえいつも通りに撃っていればおれはオリンピックに出ることができたのだ。その時にも回りのみんなに言われた。「オリンピックまであと3cmだったのに」と。

犯人グループを追いつめて銃撃戦になり、名誉の負傷を負った時にも医者と言った。「あと3cm左にずれていたら大腿動脈を撃ち抜かれて大量出血で即死だったでしょう。不幸中の幸いです」。冗談じゃない。おかげでおれはペニスときんたまを失ったのだ。いっそ大腿動脈を撃ち抜かれて即死していれば良かった。

警察官になる前、短い期間だったが石油の掘削に携わったことがある。あるはずの石油を掘り当てられない。担当者が変わるとすぐに出る。そして言われる。「惜しかったですね。すぐそばまで掘ってたんですよ。あと3cmずれていれば、ドッカーン、ビンゴ！だったのにね」

思い返せば子どものころからいつもそうだった。あと3cmああだったら、あと3cmこうだったら。クラスの好きな女の子と同じグループになりたかったのに、あと3cmのところまで線を引かれ分かれてしまった。一度だけ連れていってもらった遊園地で、どうしても乗りたかったジェットコースターに身長があと3cm足りなかった。学生の頃ありえないくらいいい女とキス寸前まで行ったときもあと3cmで邪魔が入った。

それでおれは自分のことを一寸法師と呼ぶようになった。あと3cm、あと一寸でおいしいところを逃し続ける、修行僧みたいな人生だからだ。そう思い定めれば意外に諦めもつく。うまくいかなければ「一寸法師らしくていいじゃないか」と思えばいいのだ。怪我も挫折も失恋もみんなそうやって乗り越えてきた。今回のことを除けば。

「思い出はたっぷり楽しんだかい？」

目の前の一寸法師が言った。

「ああ、おかげさまで。一寸法師の人生をね」

「一寸法師の人生？」一寸法師は目をクルクルさせながら言った。「冗談だろ？ 一寸法師抜きの人生だろ？」

何を言っているんだこいつは。

「いつもいつもあと3cm足りない人生ってことさ」

「それはぼくの方じゃないか！」一寸法師は小さな目を真剣にキラキラ光らせながら言った。「ぼくがない分、足りないんじゃないか」

何を言い出したのかわからず返事に窮していると一寸法師はカンカンになって怒り出した。「まさか君、ぼくのこと、忘れたんじゃないだろうね！」そういうと一寸法師は自分の身長ほどもある、つまり3cmほどの刀をすらりと抜いて叫んだ。「一緒にてのひらを切って約束したじゃないか！」

言われて思わず左手を広げ、おれは自分のてのひらの3cmほどの傷痕を眺め、そして——そして何もかも思い出す。「この子はいつもぼんやりして、昼間っから夢を見ているようだ」と心配された子どものころのことを。一寸法師は泣きながら叫んでいる。

「もう子どもじゃないから、ごっこ遊びはよしなさいって、ぼくのことを忘れろって親に言われたからって、君がそう言ったときに、約束しただろ。それでもぼくはそばにいるから、本当に必要な時にはまた出てくるからって」

「そうだったな」

「だから君がこんなになって、奥さんもお子さんも死んじゃって、君まで自分で死のうとなんかするからぼくは」

「助けてくれたんだ」

「だってぼくは君に死んでほしくないから」

「あと3cmって言われたんだ」

おれもボロボロ泣き出していた。

「あと3cmずれていたらあなたも鉄骨に当たって命はなかったでしょうって。ずれててくれりゃ良かったんだよ！ いっそ死んでいれぼって。あいつらと一緒に死んでいれぼって。だから」

「だから君は猛スピードで崖から車を転落させた」

「あいつらのところに行きたかったんだ」

「そんなことしても奥さんもお子さんも喜ばないよ」

「そうかもしれん。だが」おれは一寸法師に言った。「もう生きていたくないんだ」

一寸法師ははっとした顔つきをしておれを見つめた。おれも一寸法師を見つめた。そうだった。こいつだ。おれが小さいころ、四六時中話をしていた相手はこいつだった。どうして忘れていたんだろう？ あんなにいつも一緒だったのに。

「じゃあ、ぼくが殺してあげる」

「なんだって？」

「ぼくが君を殺してあげる。この剣で君の心臓を刺してあげる」

「そうか」おれは笑った。「3cmずれて死ねないなんてなしだぜ」

「ぼくがここにいるから」一寸法師は言った。「あと3cmの人生はもう終わりだよ」

「そうか。じゃあ頼む」

「ぼくのこと、忘れないでね」

「それ、逆だろう」おれはまた笑って言った。「でもまあ、わかった。忘れない」

おれは胸を張った。一寸法師は抜き放った刀を水平に構えると、鋭い裂帛の気合いを放ち、おれの左の胸に飛び込んできた。胸に痛みが走ったと思ったが、おれの胸に当たっているのは刀の柄（つか）の方で、刀身は一寸法師の身体を貫いていた。そして一寸法師はそのまま勢いをつけておれの胸の中に吸い込まれて行った。最後の声は「さよなら、そしてただいま」だった。

\* \* \*

いまおれはリハビリに取り組んでいる。あの日見たのが幻想だったのか何なのかわからない。ただおれはいま、いなくなったあいつらのことを忘れないでいようと思っている。そのためにはおれが死んでしまったりいけないと思っている。一寸法師よ、おれの中のどこかにいる一寸法師よ。あと3cmを埋めてくれてありがとう。けど、あと3cmの人生もそんなに悪いもんじゃなかったぞ。だからおれはこうしてその思い出を大事に生きている。おかえり、一寸法師。おかえり、

おれ。

(「あと3cm」 ordered by エルスケン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## フェイド・アウト

<http://p.booklog.jp/book/42524>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42524>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42524>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.